

モボ・モガ

▼オレは村じゅうで一番、モボだと言われた男……。ご存知エノケンの歌にあわせて、金髪の男たちがズボンの裾折り曲げて、缶ビールのぎっしり詰まった冷蔵庫を開けたり閉めたりするCFがある▼モボってなんだ？といっしょにテレビを観ていた弟が訊くから、そりゃあなあ、モダンボーイのことだ。大宅文庫には△モボ・モガ▽って項目があつてな、モボはモダンボーイ、モガはモダンガールの略。そんなことも知らんのか、とエバつた。ふーん、と鼻で言つた弟、どんな恰好してたんか？ときた。そりゃあモダンな……。こつそり調べた。およそ次のようなものらしい▼大正末期から昭和の初期、銀座に「断髪して後頭部を青く剃り上げ」「舶来のストリート・ガール式に眼隈や頬紅をつけ」「洋装と称する不規則な布片をぶらさげて肉体美を見せ」「流行の柄の太い蝙蝠傘を持った」女たちが現われた（『女性』昭2・10「毛断ガールの本家本元」高田義一郎）。それをモダンガールと名付けたのは新居格であつた。（『中央公論』昭4・10「百パーセント・モガ」大宅壮一）▼同じように西洋かぶれの男たちがいた。「頭の毛を奇麗に襟足を見せて刈り、油をテカテカ塗って、櫛の目も鮮かに、オールバックしている。顔は女の白粉下のようにカミソリのと青々として、クリームくらいしたしなんている美しい肌である。下に目を移して洋服を見ると、胸のあたりに一つボタン裾ひらきの縞ラシヤの背広を着て、ズボンのシワ目は切れるまでつけようとす凡帳面さ、ワインシャツは「よくフランスの美男俳優ジャック・カトランのスクリーンで見る縞カラー」（『婦人画報』大15・6「モダンボーイの服装警見」梅山一郎）「モッサンの帽子にロイド眼鏡、灰色の上着にラッパズボンのいでたちで、右手にアッシのケエン（白樺製のステッキ）もってセミ・フレンチのシューズをはいていた」（『アサヒ芸能』昭43・2・11）。彼らはモガに対してモボと呼ばれた▼モガの軽やかな装いに比べてモボの服装は重苦しい感じ。——モガとモボ銀座を太く細く来る（失名氏——（日置昌一著『ものしり事典・言語篇』河出書房）